

5-2013

Classroom-Library Collaboration: Incorporating Information Literacy into the Beginning Japanese Curriculum Using Japanese Grade Readers and Other Resources Beyond the Textbook | 図書館との連携による情報リテラシー教育を取り入れた初級日本語カリキュラムの作成と実践—多読ライブラリーや教科書外のリソースを使った日本語情報リテラシー・プロジェクト—

Atsuko Takahashi
Smith College, atakahas@smith.edu

Sharon Domier
University of Massachusetts Amherst

Follow this and additional works at: https://scholarworks.smith.edu/eas_facpubs



Part of the [Japanese Studies Commons](#)

Recommended Citation

Takahashi, Atsuko and Domier, Sharon, "Classroom-Library Collaboration: Incorporating Information Literacy into the Beginning Japanese Curriculum Using Japanese Grade Readers and Other Resources Beyond the Textbook | 図書館との連携による情報リテラシー教育を取り入れた初級日本語カリキュラムの作成と実践—多読ライブラリーや教科書外のリソースを使った日本語情報リテラシー・プロジェクト—" (2013). East Asian Languages & Cultures: Faculty Publications, Smith College, Northampton, MA. https://scholarworks.smith.edu/eas_facpubs/20

This Conference Proceeding has been accepted for inclusion in East Asian Languages & Cultures: Faculty Publications by an authorized administrator of Smith ScholarWorks. For more information, please contact scholarworks@smith.edu

図書館との連携による情報リテラシー教育を取り入れた
初級日本語カリキュラムの作成と実践
—多読ライブラリーや教科書外のリソースを使った
日本語情報リテラシー・プロジェクト—

**Classroom-Library Collaboration:
Incorporating Information Literacy into the Beginning Japanese Curriculum
Using Japanese Grade Readers and Other Resources Beyond the Textbook**

高橋 温子
Atsuko Takahashi
スミス大学
Smith College

With シャロン・ドマイヤー
Sharon Domier
マサチューセッツ州立大学アマーフト校
University of Massachusetts, Amherst

1. 情報リテラシーを日本語初級カリキュラムに取り入れた背景

筆者は、2010年より、図書館員と協働作業のもと、アメリカ東海岸の私立女子大学、スミス大学(以下、本学と言う)1年生春学期コースにて、情報リテラシー教育を取り入れたカリキュラムを実践している。日本語コースカリキュラムに情報リテラシー教育を取り入れるきっかけになったのは、2008年の秋に日本語学習者についての話し合いの場をもったことだった。我々が共通して懸念していた問題は、教科書中心の初級カリキュラムに慣れた学習者が、中級カリキュラムに進む際に、生教材を中心とした内容重視型カリキュラムにて求められる自律学習能力に欠けているという当時の現状であった。

近年、日本語教育では、日本語中・上級レベルにおいて内容重視型カリキュラムや批判的思考力を取り入れた学習活動の採用についての研究発表が増えている。近松(2011)は、日本語上級レベルにおける「米国シカゴ日系人史」をテーマにした内容重視のカリキュラムに、批判的・創造的思考力を取り入れた学習活動の試みを報告している。さらに、佐藤、熊谷ら(in press)は、内容重視型のカリキュラムに、批判的思考力を取り入れたアプローチを「内容重視の批判的言語教育」と呼び、内容に関連した言語スキルと知識を伸ばすことに加え、物事を批判的に考察し、それについて創造的に自分の意見を形成し、自身の意見を書く、あるいははなんらかの形で社会に対して表現することで、自らが日本語や母国語を通して社会貢献できる能力を備えた日本語学習者を育てることを提唱している。

内容重視の批判的言語活動は、新聞記事、文学、エッセイなどの生教材を中心に進められることが多く、このような学習活動に積極的に参加し、効果的に言語と内容に関する学習を進めていくためには、まず学生自身の自律学習能力が問われる。特に、母国語と日本語との間で効果的な辞書活用能力、情報検索能力、情報活用能力というような日本語情報リテラシーが求められるであろう。しかしながら、初級レベルでは、教科書の基本文法、語彙、表現、漢字を学習するという言語習得を重要視した伝統的なカリキュラムが組まれているのが一般的である。また、初級教科書の読み練習は、速読術によって、内容の大意がつかめるか、提示された指示に従って、質問に答えることができるか

が重要視されている。読み物には語彙表が添えられており、学習者がわからない語彙で立ち往生した場合、教師はその意味をその場で与えるか、辞書を使わずに前後の文脈からその意味を推測するように指導するのが主流であろう。このような指導のもとに育った初級学習者が、生教材を中心とした内容重視型カリキュラムに進んだ際に、そこで求められる自律学習能力の違いに戸惑いを感じるようである。

そこで、筆者は、日本語情報リテラシーを備えた学習者を育てることを目的に、情報リテラシー教育と日本語教育をどのように融合させたらよいか、図書館員と協働作業のもと、日本語初級レベルの段階から情報リテラシーの概念を取り入れたカリキュラムの考案に向けて話し合いを始めた。まず、2009年の春学期に、本大学の日本語2年生コースにおいて、情報リテラシー教育の概念を取り入れながら、俵万智の「サラダ記念日」の短歌を教材として使用し、漢字辞書の使い方を指導する授業を行った。授業の詳細は、高橋とドマイヤーによるAATJ (2010)での発表や、ドマイヤー(2009)のレポートを参考にしていきたい。

当時、我々は、情報リテラシー教育は、本学の中級に入る手前の日本語2年生春学期で行うのが効果的ではないかと考えていた。しかし、中・上級レベルでのカリキュラム革命が進む中、それに連携するためにも、初級と中・上級レベルの間で自律学習能力の一貫性を持たせ、日本語情報リテラシーを初級レベルから培うべきではないかと考えるようになった。そこで、翌年、2010年春学期から、本学の日本語1年生のカリキュラムに情報リテラシーを取り入れる試みを行った。

3. 図書館教育における情報リテラシーとは

本発表での情報リテラシーとは、アメリカ図書館協会(2000)が定義した、必要な情報を認識し、効率的にそれを探し出し、評価し、目的に応じて効果的に活用する能力に基づくものとする。Abilock (2007) は、情報リテラシーとは、個人が自身の学習活動に必要な情報は何かを把握し、それを検索、理解、評価し、選択された様々な形態の情報を使って、個人、社会、あるいは世界のために、何かを創りだしていく過程のことであると定義している。さらに、情報リテラシーを構成する概念として、学習者の情報検索の効率のよさと的確さ、情報に対する理解と批判的思考、情報を適用し活用するための自律性、社会性、倫理性、創造性などもあげられている。Mackey と Jacobson (2005) は、大学レベルでの情報リテラシー教育を効果的に進めるには、大学教育においてどのような学習者を育てたいのか、図書館員と大学教員が意見と関心を共有し、互いの専門知識や技術を提供しあい、チームとなって情報リテラシー教育を行うという協働作業のモデルを提唱している。協働作業を通して、コースの目的に沿いながら、学習者の批判的思考を促すクラス活動を作成していくことの必要性も述べている。

そこで、我々は、最初の話し合いをもった2008年の秋以降、年ごとに段階を踏み、本学日本語初級レベルにおいて、情報リテラシーはどのような言語学習能力につながっているのかを検討しつつ、教師は具体的にどのようにクラス活動に応用できるのかを考案し、それを実践することを試みた。

4. 日本語1年生のカリキュラムに情報リテラシー教育を取り入れる試みとその方法

4-1. 環境作り

まず、日本語情報リテラシー教育のための環境作りとして、図書館に日本語学習者向けの本やDVDを揃えることから始めた。筆者は、2010年にグラントに申し込み、1000ドルで、児童向け絵本、ひらがな、カタカナの本、昔話、図鑑、マンガ、短編小説(ドラマ、ミステリー、サイエンスフィクションなど)、多読ライブラリー(レベル0からレベル4まで)な

どを購入した。本を購入する際に考慮した点は、初級から中級学習者の日本語能力に沿った書き方がなされているか、文体が基本的に「です／ます体」で書かれているか、既習した文法や語彙や漢字が多く使われているか、漢字にふりがながふってあるか、挿絵やイラストや写真がはっきりしてきれいであるか、教科書で取り上げられているトピックや、日本文学や歴史のクラスに関連性があるか、学生の日本文化や日本語学習への興味と関心に呼応する内容であるか、などの点に注意しながら、様々なジャンルから本を選ぶようにした。また、本の選択には、NPO日本語多読研究会のウェブサイトも参考にさせていただいた。今も、大学の図書館経費を使いながら、少しずつ日本語の本を増やしているところである。今後も日本語学習者向けのコレクションを増やしていく予定であり、これらのコレクションを使いながら、将来、日本語多読のコースを開設したいと考えている。

4-2. 図書館の日本語コレクションへ招待

1年生秋学期の最後に、特別授業として、学生を図書館の日本語コレクションに招待した。ほとんどの学生が、初めて東アジアセクションに来たといい、大学に自分たちが読めそうな日本語の本があることを知らずにいたようだった。授業の目的は、図書館にある日本語の本を紹介することと、実際に本を手にとって立ち読みしてもらうことである。この授業で、教科書や漫画以外に初めて日本語の本を手にする学生が多く、五味太郎の絵本をみて「話がわかる!」と喜ぶ学生や、昔話を興味深そうに読む学生、日本の妖怪図鑑やオノマトペの本を見て話が盛り上がり、日本の家庭料理のレシピ本をめくっては、肉じゃがや親子丼を作りたいという学生など、学生の興味によって手に取る本は違ったが、みな楽しそうに本に見入っていたのが印象的だった。授業の終わりに、実際に手に取った本を借りていく学生もいた。

4-3. 教科書以外の読み物に関するアンケートの結果

この授業の後で、筆者は日本語1年生の学生に、以下のような簡単なアンケートをした。全クラス34人中24人が匿名アンケートに答えてくれた。アンケートの目的は、日本語1年生が教科書以外の日本語の読み物についてどう考えているかを調べることである。教科書の読み物以外に日本語の本や話を読んでみたいか、もし読むとしたら、どんなスキルや能力が必要だと思うか、どのような本やリゾースが日本語学習に役立つと思うか、どんな本を図書館に入れて欲しいか、などという質問に対して答えてもらった。

まず、「図書館の日本語コレクションに、興味を引く本があったか」という質問に対し、全員が「興味を引く本があった」と答えた。これは、いい傾向である。学生らの日本語能力に沿いつつ、個人個人の興味に見合った、いろいろなジャンルの本を置くことの意義があったといえる。「教科書の読み物以外に日本語の本や話を読んでみたいか」という質問には、80%以上の学生が「読んでみたい」、残りの20%の学生が「どちらかといえば、読んでみたい」と答え、アンケートに答えた全員が読んでみたいと前向きな意向を示したが、「自分で教科書以外の読み物を読めると思うか」という質問には、「読めると思う」、「たぶん、読めると思う」と答えた学生は、全体の50%程度にとどまった。学生は教科書以外の日本語の本や話を読めることにかなり関心があるようだが、実際に自分でそれが読めるかどうかについては、あまり自信がないようであることがわかる。

次に、「もし、読み物の中に、知らない語彙がでてきたらどうするか。」という質問に対し、「推測してわからなかったら辞書で調べると思う(58%)」、「文の意味がわからなかったら辞書で調べると思う(62%)」、「それが2、3回出て来たら辞書で調べると思う(25%)」という答えが全体の92%を占め、「全部調べると思う(8%)」は、少ないことがわかつ

た。初級学習者とはいえ、読み物の中での辞書の選択的な使用についての基本概念があるようである。

「教科書以外の読み物を読む際に、どんなスキルや能力が必要だと思うか」という質問には、「語彙、漢字の知識」が大半を占め、続いて、「文法、日本文化、話し言葉や方言の知識」が必要だという答えが多かった。特に、漫画は話し言葉が多く、男女言葉や方言が多く文末に使われているという指摘があった。その他に、「自信や辛抱強さ」、「文脈からの語彙や文法の推測力」、「語彙を文法の認識力」、「読みの練習を続ける努力」というような、メタ認知力を示唆するコメントもあった。初級学習者だからこそ、知らない語彙、漢字、文法、文末表現に対する認識が鋭いともいえ、それに対して、読解の際にどう対処したらよいか、学生自身の中で、実践的、心理的な対処方法を考えているようである。

最後に、図書館に入れてほしい日本語学習に役立つ、または読んでみたい本について質問したところ、「子供向けの絵本、児童文学、漫画、民話、ポップカルチャーやファッション雑誌、料理のレシピ、日本文化を説明した本」などの答えが多くあがった。学生たちのリクエストに応じて、これからも図書館に日本語の本を増やしていくつもりである。

4-4. 教科書主体のカリキュラムを生かした日本語情報リテラシー教育

1年生の春学期に、日本語情報リテラシー授業を3回にわけて行った。本学日本語1年生は秋学期(第1学期目)に『げんき1』の第8課まで、春学期(第2学期目)に第9課から『げんき2』の17課まで勉強する。カリキュラムは教科書中心、クラスでは文法導入の講義と練習が中心である。2013年の春学期の学生数の平均は1クラス約12名で、1年生2クラスの合計学生数は約24名である。

まず、日本語情報リテラシー授業では、教科書で習っている内容にしたがって教科書主体のアプローチでトピックを設けた。教科書主体のアプローチのよさは、1)教科書から離れた学習量を増やさずにすむ、2)教科書で既習した、またはこれから習う文法、表現、語彙、漢字などをクラス活動に使ったり、応用したりできる、3)教科書に出てくる言語的、文化的な知識に、教科書外の情報源や別の視点から関わることができる、4)教科書と外の世界とのつながりを学生自身が自ら学習体験でき、自律学習を培う手助けになったり、好奇心を広げるきっかけになることである(高橋 2010)。

また、筆者らは、情報リテラシーの概念が、日本語初級レベルのカリキュラムにどのようなあてはまるかを検討しつつ、日本語1年生の情報リテラシーの目標を以下のように設定した。

1. 文脈や状況に応じて、適切な語彙や表現を選ぶことができる。
2. 日本語で、昔話、短いエッセイ、旅行の情報などを読むことができる。
3. 適切な情報源から、興味があるトピックについて多様な情報を探することができる。
4. 検索した情報を取り入れながら、自分の言葉で何か短い文章を書くことができる。
5. 情報の検索と活用活動を通して、日本語を使いながら、何か新しい知識を生み出すことができる。
6. 日本語学習において、知的好奇心や自主学習能力を高めていくことができる。

これらの目標に添って、日本語情報リテラシーのクラス活動の具体的な教案を作成し、授業を実践することにした。特に、教案には必要な情報はなにかを検討し、見つけた情報の有効性、正当性、適切な使用方法を評価し、その情報を目的に沿いながら効果的に活用し、外部に発信していくという、基本的な情報リテラシー概念をフレーム

ワークとして取り入れた。また、一度習った辞書検索や情報検索のスキルは次の授業でも使えるように計画し、3回の授業を通して、情報リテラシースキルの上達を図った。

4-5. 図書館で日本語情報リテラシー授業:和英辞書を使いながら、「かさじぞう」を読む
日本語情報リテラシー授業は、教室ではなく、図書館のグループスタディができる一画に学生を集めて行った。教室の外で日本語学習をするにあたって、インターネットでは利用できないリソースの種類、それらの利用の仕方や利用価値を知ってもらうことも情報リテラシー教育の一部ではないかと考える。そこで、初級レベルの時期から図書館の日本語学習リソースに関心を持ってもらい、利用してもらうべく、日本語情報リテラシーのクラス活動を図書館で行うことにした。

第1回目は、『げんき1』10課の読み物の「かさじぞう」と同じく、昔話「かさじぞう」、第2回目は『げんき2』13課の読み物「日本のおもしろい経験」に関連づけた「日本愛 (Japan Ai)」、第3回目は『げんき2』17課の読み物「ドラえもん」と漫画「ドラえもん」にちなんだ「オノマトペ」というトピックで、そのトピックに関わる本、ウェブサイトなど、教科書の外にある情報源を準備し、タスクベースアプローチに基づく課題を考案した。学生は、課題にある質問に答えるために、必要な情報はなにかを検討し、情報検索ツールや和英辞書(書籍またはオンライン)を使いながら、情報源から適切な情報を探し出す。そして、いくつかの情報源の中から目的に合った適切な情報を選び、それを自分の意見や発言の中に取り入れ、日本語で表現するという言語活動に発展させた。例えば、第1回目の「かさじぞう」のクラスでは、教科書の語彙リストを削除した「かさじぞう」の読み物を準備し、学生はそれをいくつかの和英辞書を使いながら「かさじぞう」の話を読んだ。話を読み終えた後は「かさじぞう」の絵本から抜粋した絵を数枚使い、日本人の子供たちに「かさじぞう」を語り聞かせることを想定して、「かさじぞう」の紙芝居を演じる活動をした。

また、クラス活動で提示する質問は学習者の主観的な意見や個人的な興味、関心を助長するように作成した。例えば、第2回目の日本語情報リテラシー「日本愛 (Japan Ai)」のクラスでは、学生が自ら日本での旅行を計画するというクラス活動をした。まず、準備段階として、クラスで、げんき14課の読み物「日本のおもしろい経験」を読み、語彙、文法の復習と内容理解を済ませておき、情報リテラシー授業では、Aimee Major-Steinbergerの『日本愛 Japan Ai』の最初のイントロ部分を読んでもらってから、日本政府観光局のウェブサイトや日本縦断食べ物図鑑などの生教材を情報源として、日本で旅行してみたい場所、そこでしてみたいこと、食べてみたい食べ物、おみやげに買いたい物などについて検索させた。そして、どうしてその場所を選んだのか、どんな所なのか、その食べ物を食べてみたい理由などを含んだ簡単な計画書を、既習した文法、表現、漢字、語彙を使いながら書かせた。最後に、それをクラスメートや他の人たちと共有するために、学生の個人ブログに投稿してもらった。初級日本語情報リテラシー・プロジェクトの詳細は、高橋(2013)の報告を参考にしていきたい。

5 クラスでの図書館授業のフォローアップ

5-1. 多読ライブラリーと読み物レポート・プロジェクト(和英辞書を選択的に使う試み)

図書館授業の後、辞書の復習と応用として、多読ライブラリーを使った読み物レポートプロジェクトを行った。日本語教育における日本語多読教材の効果や効用については、三沢・原田(2011)による付随的語彙習得の効果や、AATJの発表での熊谷(2013)による学生の自主学習力の向上と生涯アーティキュレーション実現への効用があげられるが、実践、研究報告は、まだ少ないようである。

NPO多読研究会の栗原(2012)は、多読をする時には、1)やさしいレベルから読む、2)

辞書を引かない、3)わからない言葉は飛ばす、4)進まなくなったらやめて、他の本に移る、という4つのルールを提示している。多読は、少しぐらいわからない言葉があっても、飛ばしながら楽しく読んでいくという読み方を身につけることで、学習者が日本語の本を恐がらずに、大量の日本語に触れることができ、知らず知らずのうちに大量の語彙や表現を身につけていくことを目的にしている。しかしながら、日本語情報リテラシーを推進する日本語教師としては、せつかく辞書を使う姿勢を得た学生に、辞書を使って何か話を読むという機会を作りたいと考えずにはいられない。そして、初級レベルの学生が、語彙や文法などに無理なく読めそうな多読ライブラリーの本を、情報リテラシーの教材のひとつとして使ってみたいと思わずにはいられない。

日本語1年生のクラスで、多読ライブラリーのレベル0～2を紹介し、クラス内で貸し出しを行った。学生は実際に本を手にとると、日本語1年生でも読めそうな日本語で書かれていること、漢字にふりがながふられてること、絵がきれいなこと、トピックがおもしろそうなこと、話が短くまとめられていることなど、自分のレベルでも読める本があることを知って大変喜ぶ。そこで、読むプロジェクトでは、多読のメソッドを使いながら、辞書の使用については「使いたければ使う」というように指導した。そして、好きな話を読み終わったら、その話の中で新しく習った語彙3つを使いながら、簡単なレポートを書いてもらった。また、クラス内活動として、授業の始めにミニ・スピーチを設け、そこで、読んだ話を1～2分程度で簡単にクラスメートに紹介してもらった。学生は、自分が読んだ話についてのスピーチがあると、積極的に質問やコメントをし、まだその話を読んだことがないと、次に読んでみようという気になるようである。初級レベルのクラスの中で、多読ライブラリーを通して、読書クラブのような雰囲気が広がっていくのはいい傾向ではないかと感じた。

5-2.「イメージとそのお話」作文プロジェクト(英和辞書を使う試み)

読み物プロジェクトと平行して、「イメージとそのお話」という作文のプロジェクトを行った。これは、自分で何かひとつ写真や絵などのイメージを選んで、その話を書くというものである。おそらく、どの大学でも初級レベルで似たような作文プロジェクトをしていると思う。イメージについて、創造的に話を書く学生もいれば、事実に基づいた話を書く学生もいた。作文を書く場合は、学生は英和辞書を引くことが多くなる。図書館授業では、和英辞書を使うことが多いのだが、日本語1年生で英和辞書を引く経験もしてほしいと思い、このプロジェクトを行った。

まず、作文を書く準備段階として、選んだイメージと話に関係する語彙を3つ選んでもらい、それらの意味を英和辞書で調べてもらった。そして、その3つの語彙を使ってどんな話を書くのか簡単なプロポーザルを書いてもらった。プロポーザルを読んで感じたことは、初級学習者にとって、英和辞書を使っての文脈に沿った語彙選びがいかに難しいかということである。実際のところ、中・上級の学習者でさえ、使ったことがない語彙を英和辞書で調べ、それを文脈の中で適切に使うのは、なかなか難しいことである。情報リテラシー授業をする前は、作文の中で使いたい単語をどう調べてよいかわからず、英語で書いてくる、英語をカタカナ音にしようとしてみる、あるいは、空白のままにするという学生が多かった。情報リテラシー授業の後では、そのような学生はいなくなったが、英和辞書を使って、文脈にあった語彙選びをすることは大変困難なようである。しかし、初級の学習者に日本語情報リテラシーの種を植えることはできる。調べた語彙を文脈で使うための語彙選びの慎重さを学ぶこと、英和辞書をいくつか使いながら語彙の意味の違いを比べること、和英辞書を使ってダブルチェックをし、英訳から見た語彙の適切さを調べること、などの辞書の効果的な使い方を知ってもらうことはできるであろう。和英辞書と英和辞書を引く姿勢と自信を少しずつ身につけてもらうことと、その際に調べた情報の

正確さや適切さについての評価の必要性を促すことは、初級レベルからでもできるのではないかと思う。

6. まとめ：日本語情報リテラシーを初級レベルから培うことについて

6-1. 初級と中級の架け橋になる

このように、初級レベルから日本語情報リテラシーのひとつとして、辞書の選択的な活用を言語学習能力と共に培うことは、学習者の初級から中級レベルへの移行をスムーズにし、言語・文化・社会情報に関わる内容重視型の学習活動に必要とされる日本語情報リテラシーや自律学習能力の育成に役に立つのではないかと考える。さらに、初級レベルの段階から、日本語学習は教室活動や教科書上の学習だけではなく、教室活動と教室外活動、教科書内容と教科書外の世界との関連性を明確にし、教室と図書館などのリソースを学習の目的や個人の興味に応じて関係づけ、必要に応じてそれらを効果的に活用していく自主学習能力の育成を支援することも大切だと感じる。その際に、日本語情報リテラシーは、学生の日本語学習意欲や日本社会や文化についての好奇心を広げる助けにもなるであろう。

6-2. 多読ライブラリーの活用

日本語情報リテラシーのプロジェクトに、教科書の読み物だけでなく、多読ライブラリーを用いたことは、学生が生教材を読む前の準備段階として、また、選択的な辞書活用の練習の場として、非常に役立ったと思う。さらに、読んだ話の内容と自分の考えや経験などを関連づけながら、初級の言語能力であっても話について、感想や自分の意見を述べたり、それを他の読者にどう伝えるか考えたりすることは、自身の批判的な視点を外に向けて発信していくという、初歩的な批判的言語活動にもつながったのではないだろうか。学生には、多読ライブラリーを読んで、速読のコツをつかんでもらい、さらに日本人向けの本にもチャレンジしてもらいたい。そして、それが読める、わかる、嬉しい、楽しいという自信をつけながら、中級以降、無理なく日本人向けの本や新聞などを読んでほしいと願う。

6-3. 生涯学習を支援する

初級以降の日本語のクラスが取れない学生にとっては、日本語情報リテラシーを有効に活用することで、何らかの形で日本語学習を続けていけるであろう。また、日本に留学する学生にとっては、日常生活や語学学習の際に必要な情報は何か認識し、自分で情報の検索、評価、応用ができるということは、留学経験をさらに意義深いものにし、学習者としての自信と達成感をさらに強めることができるのではないかと思う。アメリカ図書館協会の *Presidential Committee on Information Literacy* が、情報リテラシーは、情報社会において「生涯学習」の一翼を担うと唱えているように、日本語教育においても、日本語情報リテラシーは学生の生涯に渡る日本語学習に不可欠な能力といえ、自主学習を持続させていく上で必要な能力の一部になるのではないかと考える。

6-4. 自主学習を支える技術、自信、好奇心を支援する

日本語情報リテラシーのプロジェクトを通して、初級学習者の教科書外の読み物やリソースに対する好奇心の強さと、それらにつながった際に発揮する個性や創造力に大変感心させられた。日本語情報リテラシーを身につけることにより、学習者が自ら、好奇心や探究心を追求できるおもしろさ、情報活用能力と言語応用能力を生かして日本語で自分自身を表現できる楽しさを実感し、初級レベルでも教科書の外とつながって自分の個性が表現できるという自信をつけていくことは、学習者の自主学習を促し、それを継続させていく上で重要な要素であると考え。そして、このような学習者が、中級・上

級レベルに進むことで、クラス活動がより効率的に進められるだけでなく、日本語リソースを効果的に利用した幅広くまたは奥深い内容重視型の学習活動を可能にするのではないだろうか。中・上級レベルの言語教育における批判的思考、人格育成が問われる中、初級学習者の日本語能力を伸ばすだけでなく、日本語情報リテラシーの種を植え、自律学習や自主学習能力の育成に貢献していくこと、また、日本語生涯学習を実現させるための機会を支援していくことは、今後の日本語教育の発展に有意義な教育的投資になるのではないかと考える。

6-5. 日本語教師の図書館員のそれぞれの役割と協働

また、日本語情報リテラシー教育における、日本語教師と図書館員の協働作業については、互いの関心について話し合い、専門分野の知識や経験をふまえながら意見交換をすることが大切である。その上で、日本語教師は、図書館授業を計画する際に、情報リテラシーをいかに言語活動に応用できるか、学生の言語能力に見合った情報リテラシー活動とはどのようなものか、などを考慮することが大切である。また、図書館員と協働で行った授業の後、どうやってクラス活動やプロジェクトなどを通して、学生に日本語情報リテラシーを継続させていく機会を与えていくかを考えていく必要がある。図書館員は、一度、日本語の授業を見学し、どのような授業を行っているかを知ることが大切である。授業内では、外国語学習者に触れ、外国語学習者のニーズを直接知ることができるよい交流の場になる。また、違うレベルの日本語クラスを見学し、日本語プログラムの一貫性を把握することで、図書館にどのようなリソースが必要とされているのかを考え直すよい機会になるであろう。学生にとっても、このように教室外での日本語学習を支援してくれる日本語教師と図書館員の存在を知ることが、大変心強いようである。共々、互いの仕事量が少し増えることは確かだが、協働作業から学ぶことは、互いの専門分野の新たな知恵や可能性を与えてくれるのではないかと思う。また、大学内においても、図書館と学部のつながりを強め、互いの教育活動を支援しあい、高め合うよい機会になるのではないだろうか。

7. 今後の展望

先のAATJの熊谷の多読クラブの発表で、生涯アーティキュレーションの実現に向けた多読コースの開設が示唆されたが、筆者も本学や近郊の日本語学習者を集めた多読コースの開設に向けて、準備を始めているところである。また、日本語情報リテラシーを生かした中・上級のカリキュラムやプロジェクトの作成も試みている。昨年の秋学期には、日本語4年生で、学生が自ら読み物、語彙表、質問をすべて準備してきて、クラスをリードするという「先生プロジェクト」、また、この春学期の日本語3年生では「ビブリオバトル」という、日本文学を読んで、みなが一番読んでみたい本を選ぶ発表対決をするプロジェクトを行った。これらは、初級レベルの日本語情報リテラシーを基に構成されており、図書館のリソースを使い、日本語情報リテラシーを応用しながらプロジェクトを進めていくものである。近い将来、その実践報告や結果について、日本語教師や図書館員の皆さんと分かち合いたいと考えている。さらに、日本語情報リテラシーや多読の実践に興味がある日本語教師や図書館員の方々と共に、ワークショップや勉強会などを設けたり、オンラインの日本語学習者向け読書レビュークラブを作ったりできたら、と夢を大きく掲げつつ、今後も活動を続けていきたいと思う。

参考文献

- Abilock, Debby. (2007). Information Literacy at Noodle. (online)
<http://www.noodletools.com/debbie/literacies/information/lover/infolit1.html>
(accessed 2013-04-05)
- Association of College and Research Libraries, Presidential Committee on Information Literacy. (1989). Presidential Committee on Information Literacy: Final Report. (online), <http://www.ala.org/acrl/publications/whitepapers/presidential> (accessed 2013-04-15)
- Association of College and Research Libraries, A Division of the American Library Association. (2000). Information Literacy Competency Standard for Higher Education. (online), <http://www.ala.org/acrl/standards/informationliteracycompetency> (accessed 2013-04-15)
- Domier, Sharon. (2009). Infusing Information Literacy into the Japanese Language and Literature Program at Smith College, Occasional Papers Bridging Japanese Language and Studies in Higher Education, Association of Teachers of Japanese, p.10-11.
- Mackey, Thomas P. (2005). Jacobson, Trudi E. Information Literacy: A Collaborative Endeavor, College Teaching, Vol. 53, No.4, p. 140-144.
- Sato, S., Hasegawa, A., Kumagai, Y., & Kamiyoshi, U. (in press). Critical Content –based Instruction (CCBI): Theories and Japanese Classroom Practices. “Japanese Languages Education: Current Issues and Future Agenda.” Honolulu: National Foreign Language Resource Center Publications, Forthcoming.
- Takahashi, A., Domier, S., (2010). -Using *tanka*, a form of contemporary Japanese poetry, to learn how to use library resources and English *kanji* dictionaries - Collaborative work of library specialist and language instructor to introduce students to information literacy aspects of learning Japanese toward intermediate levels – AATJ アメリカ日本語学会発表原稿.
- 粟野真紀子、川本かず子、松田緑(編著)、NPO法人日本語多読研究会(監修). 日本語教師のための多読授業入門. (2012). アスク.
- 熊谷由香. (2013). 持続可能な自主学習のための支援の方策: 多読クラブの効用
An extensive reading club as a support system toward sustainable self-directed learning.
AATJ アメリカ日本語学会発表原稿.
- NPO法人日本語多読研究会. レベル別日本語多読ライブラリー にほんごよむよむ
文庫 レベル1、レベル2. (2005), (2006). アスク.
- NPO多読研究会 <http://www.nihongo-yomu.jp/ja/teachers/books/reference.html>
(accessed 2012-04-15)
- 高橋温子. (2013). 情報リテラシー教育を取り入れた初級日本語コースカリキュラムの作成と実践報告. 大学図書館研究 Journal of College and University Libraries, Volume 96. pp1-9.
- 高橋温子. (2010). 初級レベルにおける教科書内容を使ったインフォメーションリテラシーの実践と提案—飛び出せ初級日本語学習者、日本語教育と図書館教育の融合—
Getting rid of the training wheels, integrating information literacy into the beginning Japanese curriculum, CALJE カナダ日本語学会発表原稿.
- 近松暢子. (2011). 「ツールを越えた思考プロセスとしての日本語へ: コンテントベースにおける批判的・創造的思考活動の可能性」ジャーナルCALJE, 12, pp. 1-22.
- 三上京子・原田照子. (2011). 多読による付随語彙学習の可能性を探る—日本語版

グレイデイド・リーダーを用いた多読の実践と語彙テストの結果から一、国際交流基金、日本教育紀要第7号.